翠…そして見知らぬ我が家

登場人物

柳井尚雄……（やないひさお）　柳井産業の創設者で社長
柳井由美子……（やないゆみこ）　尚雄の妻
柳井亘……（やないわたる）　尚雄と由美子の息子（養子）
柳井翠……（やないみどり）　尚雄と由美子の娘
占い師……（うらないし）
栖原傑……（さいばらすぐる）　柳井産業常務、
富永正彦……（とみながまさひこ）　柳井産業常務、会社設立時からの社員
富永梨花……（とみながりか）　富永正彦の娘
野村隆……（のむらたかし）　柳井作業、技術主任
千北美寿紀……（ちぎたみずき）　由美子の会社、ループジョイの従業員
天田早紀……（あまださき）　由美子の会社、ループジョイの従業員
青田佳典……（あおたよしのり）　由美子の会社、ループジョイの従業員
城崎浩司……（きのさきこうじ）　電話通信会社の社員

照明に浮かぶ二人の男。上手側、椅子に座る占い師。下手側に立つ柳井尚雄。二人とも客席から見て真正面を向いているが、二人は対面して話しているという設定。

占い師　…占いますか？

尚雄　他に何の用があると思うの？

占い師　失礼しました。おかけください。

尚雄　いや、このままでいいよ。

占い師　…（卓の上を準備）お名前と生年月日を。

尚雄　（記入しながら）何で、こんなところに店を出してるの？

占い師　え？

尚雄　いや、こんな人通りの少ないところじゃ商売になりそうも無いから。

占い師　ここが好きなんです。緑もあって静かで、集中できます。それに繁

華街も道一本隔てているだけです。それなりに人は流れてきますよ。(手を出すように促し)拝見しましょう。

尚雄　(両手を差し出し)一日に、何人位見るの？

占い師　日によって違いますよ。

尚雄　(嘲笑)日によってか。(尚雄の手が揺れる)

占い師　動かさないで下さい。

尚雄　そんなに真剣に見なくてもいいよ。

占い師　真剣に見なくていい？

尚雄　ああ。私は、掌(てのひら)の皺(しわ)で人の性格や運命が分かるなんて本気で思っちゃいないから。

占い師　…じゃあどうして？

尚雄　暇つぶしだよ。

占い師が尚雄の手を戻す仕草、連動して尚雄も手を下ろす。

占い師　ご立派なスーツをお召しになってるのに、仰る事は残念な方ですね。

尚雄　気を悪くしたのかい？

占い師　こちらは真剣にやってますから。

尚雄　そうか。言い方は悪かった、謝るよ。でも金はちゃんと払うんだから、

占い師　真剣に見る必要が無いと仰る方はお客じゃないです。見料も要りません。

尚雄　悪かったって言ってるだろ。

占い師　お引き取り下さい。

尚雄　少なくとも私は正直に話している。信じてもいないのに信じているふりをする方がよっぽど不誠実じゃないかな。

占い師　でしたら初めから、私などに声をかける必要も無いでしょうに。

尚雄　(舞台奥方向)あそこに止まってる車、高い金を払って先月買ったばかりなのにエンストしてしまった。ＪＡＦを呼んでるけど、まだ少し時間がかかりそうでね。

占い師　つまり暇つぶしだと。

尚雄　突っかかって来るね。もちろん占いみたいなもので精神的な安らぎを得られる人間だっていると思うよ。気休めでもそれを必要とする人間にはありがたいもんだ。そういう意味では意義のある仕事だと認めるよ。

占い師　でも、ご自分がなさっている会社経営のような仕事とは比較にならない、そう仰りたいんですよね。

尚雄　…何だい、言い当てたつもりかい。どうせ車や身なりで判断しただ

けだろ？

占い師　さあ、どうでしょう。

尚雄　だいたい占いで先の事が分かる位なら、君自身もう少しましな職業に就くことが出来たはずだろ。

占い師　それは貴方の価値観です。この仕事は私の天職。生まれ変わっても同じ仕事を選びますよ。

尚雄　面白い事を言うな。じゃあ、私の家族構成を言ってみてくれ。

再度手を差出す尚雄、手相を診る占い師。

占い師　奥様と、息子さんがお一人です。

尚雄　…勘がいいんだな。

占い師　勘じゃありません。今、貴方が自覚していない貴方のお気持ちも読めました。

尚雄　私が自覚していない気持ち？

占い師　はい。暇つぶしだと仰った言葉は、貴方自身への言い訳なんです。

尚雄　言い訳？

占い師　貴方は、もし車がエンストしていなかったら占い師などに声は掛けない、自分は本来そんなものに頼る弱い人間では無いと思いたいんです。

尚雄　思いたいんじゃなくて実際にそうだよ。

占い師　いいえ。ご自分ではお気づきじゃないですが、今貴方の心にある漠然とした不安が、偶然視界に入った路傍の占い師である私の元に足を運ばせたんです。

尚雄　…なるほど、上手い営業トークだ。自分でも気づいてないなんて言われたら、そうかも知れないと思う人間も、

占い師　息子さんとは、血のつながりは無い。

尚雄　…え…。

占い師　ご養子ですね。

尚雄　…。

占い師　そして、貴方の不安の源は三十数年連れ添った奥様です。

尚雄　それは外れだ。ウチは夫婦円満だよ。私は家内の愚痴一つ聞いたことが無い。

占い師　確かに奥様は愚痴も不満も口には出さない。しかし貴方は奥様の心を図りかねている、そうですよね。なぜなら、

尚雄　ちょっと待て、

占い師　貴方は、奥様に負い目がある。

尚雄　待ってくれ。

占い師　それというのも、

尚雄　(頭を抱え込む)ちょっと待ってくれ、

占い師　…どうしました？

尚雄　…ちょっと…ちょっと待ってくれ…。

その場にしゃがみ込む尚雄。次第に占い師は闇に包まれていく。闇の中から占い師のおだやかな声が聞こえる。

占い師(ＳＥ)　まだ続けますか？　貴方、本当は分かってるんですよ…本当は…。

うずくまったままの尚雄。薄明りの中、上手より亘登場。

亘　父さん…(反応なく)父さん、

尚雄　…亘…。(立ち上がる)

亘　大丈夫？

尚雄　ああ…大丈夫だ、何でもない。

亘　車、直ったから。

尚雄　うん…。(占い師を探す視線)

亘　何？

尚雄　誰かいただろ？ここに。

亘　誰かって？

尚雄　…占い師だよ。

亘　占い師…(思い付き)ああ、それっぽい人だったらさっき…そっか、あれ商売道具だったんだ。荷物一式抱えてウチの車の前を、道を渡って行ったけど。

尚雄　…そう。

亘　ああそうか、あれが…。

尚雄　何だい？

亘　うん、良く当たる占い師って雑誌に出てたらしくて。西口公園近くの歩道でやってるって言ってたから、きっとその人だね。

尚雄　雑誌に？

亘　うん、経理の吉永さん情報。女子は占い好きだから。

尚雄　…。

亘　でも、父さんが占い師の話なんて。

尚雄　こんな人通りの少ない所で商売になるのかって、他人事（ひとごと）ながら気になっただけだよ。

亘　まあ、そう言えば確かに。

尚雄　商売は何と言ってもマーケティングだから。

亘　あでも、それで場所を替えたんじゃないのかな。この辺り、今日は誰も歩いてないし。

尚雄　…。

亘　(尚雄の様子を伺いながら)ここ、ホント静かだよね。繁華街も近いのに。

尚雄　…ああ。

亘　ねえ父さん、明日の会議なんだけど…。

尚雄　…気になるのか…栖原(さいばら)専務の事が。

亘　うん。

尚雄　亘は、栖原君が嫌いか？

亘　嫌いじゃないけど、厳しい人だよね。ミスは絶対に赦さない。

尚雄　確かにそうだな。だけどそれは、今のウチに必要な厳しさだ。いつまでも町工場（まちこうば）時代の気分が抜け切れないでいるウチの会社にね。

亘　…そうかも知れないけど…。

尚雄　柳井産業もやっと業界で中堅と言われるところまで来た。でも父さんは、出来たらお前に渡す前に、ウチの会社の一部上場を果たしたい。それには改革が必要なんだ。そして父さんがその改革を任せたのが栖原君だ。

亘　…分かってるよ…。

尚雄　明日の会議、お前もオブザーバーとして出たらいい。父さんも明日は発言しないつもりだ。栖原君に全部任せてみようと思う。

照明変わり、翌日の会議。舞台上、キャスター椅子が７脚。その前に立つ栖原がプロジェクターのリモコンを操作している。客席上部にあると想定したスクリーンの画像を見ながらテンポの良い説明をする栖原とそれに聞き入る数人の社員達。

栖原　はっきり言って私栖原、皆さん方に嫌われるのは覚悟の上で申し上げているんです。この会社の当たり前は、新参者の私から見たら異様な光景です。本当に必要な事を誰も口にしない。だから私が指摘するしか無いんです。もう一度言いますが、(秘書に渡された書類を取り)この報告書は酷過ぎる。いいですか、これについてはしつこく掘り下げますよ。(リモコン操作)はいこれ。技術の野村君、この装置について説明して。

野村　(緊張して) これは、ウチの工場の製造ラインに組み込まれている装置で、ＶＳワンです。

栖原　何をする機械？

野村　はい、製品がこのボックスを通過する時、中で施されるＶＳ加工が、製品の堅牢性を飛躍的に高めます。

栖原　そうだね。ウチが作る機械部品はこのＶＳワンの中で特殊加工されて、他社製の物とは比較にならない程摩擦や衝撃に強くなるんだよね。そしてこのＶＳワンは、今回問題になっているハノイ工場でも採用されている。ところが、我が社がそのＶＳ加工を施し三蔵製作所に収めた部品が、販売直後の重機の駆動部分で摩耗欠損するという問題が発生した。新品のショベルカーのトランスミッションが壊れてしまったんです、ウチが供給した部品のせいで。そして急遽立ち上げた調査委員会が出してきたのがこの報告書です。曰く、問題の部品にはＶＳ加工が適切に施されていなかった可能性が高いが、そうなった原因は不明である。いやいやいや、原因不明なんてあり得ないでしょう。問題が発生したという事は必ず原因があるんです。

富永　(リモコンを操作)はいこれ、去年十月、富永常務がハノイ工場を巡回した時の写真です。まあ定例の工場巡回のスナップです。常務、覚えてます？

栖原　…ああ、もちろん憶えているけど…。

じゃあこれ(リモコンを操作)同工場の製造ラインを背に、現地社員と談笑する富永常務です。この社員の名前は、常務憶えてま

すか？

富永　…確か、グエン、何とかって言ったと思うけど、どうして？

栖原　実はこれ、結構重要な写真です。二人が立っているのは製造ラインの要（かなめ）の部分です。背後に見える筐体（きょうたい）、これがＶＳワンです。（リモコンを操作）はいこれ拡大画面。皆さん、何かお気づきになりませんか。

一同　…。

栖原　分からない？じゃあ、（リモコンを操作）更に拡大。現地社員の右手を見て下さい。

一同　…。

栖原　ここまで言って分からないんじゃ話にならないな。スパナを持ってるでしょ彼。（皆の顔を見渡す）ハノイ工場のラインは最新のもので、メンテナンスは日本人だけが行い、現地社員にそれが出来る人間はまだいない筈なんです。じゃあ野村君、彼はどうして工具を手にし

ているんだろ。

野村　…立っている場所から判断して、おそらく、ＶＳワンのボックスを開けて対応していたと考えられます。

栖原　どういう意味かな？

野村　ＶＳワンは、一定数の製品を処理すると、内部のノズルを交換しなくてはなりません。その場合、マニュアル通りのやり方だと、ボックスを丸ごと交換するので、作業には三十分程かかります。でもカバーを開いてノズルだけを交換すれば五分もかからないんです。

栖原　五分かからないやり方があるのに、何で三十分もかけてボックスごと交換させるの？

野村　ＶＳワンは、気密性が重要な装置です。外部の空気が入ると微細なホコリにも反応して、不具合が発生する可能性もあるので…。

栖原　野村君、もっとはっきり言おうよ。そもそもＶＳワンの蓋はクリ

ーンルームの中以外で開けちゃいけないんだよね。作業マニュアルにも明確にそう書いてある。だけどこの現地社員は時間が惜しいのか面倒なのか、その場でボックスを開いてノズル交換をやっていたって事でしょ。これが今回の問題の原因なんです。気づかなかったんですか？それとも黙認？

野村　…それは…。

栖原　富永常務、現地に何度も出向いている貴方に伺っているんです。

亘　栖原専務、ちょっと待って下さい、

栖原　オブザーバーは口挟まない。

亘　…。

富永　…うっかりしてたよ…気づかなかった。

栖原　…そうですか。常務と並んで笑顔で写真に納まっているベトナム人の彼は、工具を隠そうともしていない。彼はこれが当たり前だと思

って、いつもこのやり方でノズル交換をしていたんです。そして、ハノイ工場の統括責任者である貴方も、こんな初歩的な事に気づかなかった、あるいは知らなかった。そういう事ですよね。

野村　あの、富永常務には技術的な面ではなく、むしろ現地の士気を高める為に工場を訪問して頂いていて…。

栖原　目の前で起きている作業規定違反にも気づかないで、どうやって士気を高めるの？

黙り込む野村。尚雄に視線を向ける亘。尚雄はちらりと亘を見るが、何も言わない。

栖原　富永常務、実はハノイ工場では、この報告書が出される何日も前に、今後ノズル交換は必ずマニュアル通りに行うようにと、内々で通達が出されているんです。

富永　え、

曲が流れ始め、畳みかけるように話す栖原。

栖原　そうだよね、野村君。

野村　(下を向いたまま小声で)…はい。

栖原　本当は問題の原因なんてすぐに分かってたんだよね。ところが、直前に工場を訪問していた常務に対する配慮から、原因を不明と発表した、これが真相。だよね野村君。

野村　…。

栖原　優しいなあ、皆さん実に優しい。でもね、もうこの規模の会社でそんな事やっちゃ駄目なんだよ。文書になった報告書はずっと残る。コンプライアンス、企業の社会的責任、考えなきゃ。こんな事、富永常務だって望んじゃいないよ。そうですよね常務。

何も言えない富永。栖原が小言を続ける中、曲の音量があがり、照明も次第に亘を残して暗くなる。

栖原　富永常務が初歩的な作業マニュアルも理解していなかった事は常務の年齢や昨今の技術の進歩を考えたらしょうがない。問題は、不

要な忖度だ。功労者を大事にするのはいいが、その為に、わが社の製品に対する信頼性を犠牲にするなんて言語道断、

亘　（照明が亘だけのスポットになり、叫ぶ）やめてくださ〜い。

亘　…やめて下さい、栖原専務。これって、吊し上げじゃないですか。富永常務は、ウチが小さな町工場としてスタートした時から、この会社の為に命がけで頑張ってくれた人なんです。入社して一年も経たない貴方に、富永常務の何が分かるんですか。

明るくなり、柳井家の居間。ソファーに腰掛ける由美子。

亘　…本当に、あの時はそう叫んでしまいそうだった。勿論、父さんが何も言わずに聞いてるのに僕が発言なんか出来ないし、元々オブザーバーだから、何も言えなかったんだけどね…。（椅子に座る）

由美子　…そう。その後（あと）、富永さん何か仰ったの？

亘　（首を横に振る）。黙って栖原専務の話を聞いてただけ。会議が終わった後、僕が話しかけようとしたら、富永のおじさん笑顔で、お疲

れ様、亘君たまにはウチに遊びに来てよなんて、何もなかったような顔して…でも、本当はすごい悔しかったと思う。それにきっと、庇ってくれなかった父さんにだって、腹が立ったと思うよ。だって、ずっと家族みたいに一緒に苦労して来た仲間なのに…そうでしょ。

由美子　…そうね。

亘　母さん、僕はね、勿論、父さんの事は尊敬してるけど…仕事では、時々父さんのやり方が分からなくなる時がある。他の会社で実績のある人かも知れないけど、栖原専務みたいな人は、ウチには向いてないと思う。そう思わない、母さん？

由美子　お母さんには、会社の事はよく分からないわ。でもお父さんには、何か考えがあるんじゃない。

亘　…僕に渡す前に会社を上場したいって、そりゃ有難いけど、何でそんなに急ぐ必要があるんだよ。

由美子　…ほら、お父さん、今はすっかり元気だけど、去年あんな大きな病気をしたから…。

亘　…結局、僕は信頼されてないって事だよ。将来の発展を僕に任せられないから、出来上がったものを渡そうとしてるんだよ。

由美子　一度、お父さんとゆっくり話してみたらいいじゃない。

亘　…近頃、父さんとは上手く話せないんだ。

由美子　どうして？

亘　そりゃあ社長と平社員だもん、僕だってけじめはつけなきゃって思ってるし…。

由美子　家に居る時は、親子でしょ。

亘　そう簡単に切り替えられないよ。だから…何だろ、父さんとの距離みたいなのを感じる…。

由美子　…亘、

亘　今日だってね、会議の後、先に帰ってくれって言われてほっとしたくらいだもん。

由美子　…お母さんにはお仕事の事は分からないから、やっぱり、直接お父さんと話した方がいいわ。その方がきっと、（ＳＥ。屋外の車の音）お父さん、帰ってきたみたい。

亘　（立ち上がり）僕、もう寝ちゃった事にしといて。

由美子　亘、

亘　今日はちょっと、無理。

由美子　…（心配げに）お休みなさい。

亘　お休みなさい。（心配げな母を見て）大丈夫だよ母さん。明日になったら、普通に出来るから。

亘、下手前の自分の部屋に消える。暫くして上手より尚雄登場。

由美子　おかえりなさい。

尚雄　ああ、ただいま。

由美子　（尚雄の様子から）お飲みになったの？

尚雄　うん、少しね。帰りに、富さんと飯を食ってきた。

由美子　富永さんと…じゃあ運転は、

尚雄　ああ、送ってくれたんだ。冨さん飲まないからね。

由美子　上がって頂いたらよかったのに。

尚雄　そう言ったんだけど、もう遅いからって。

由美子　ご挨拶したかったわ。

尚雄　亘は？

由美子　休みました。

尚雄　…何か言ってたか？

由美子　…何かって？

尚雄　今日、会社で会議の時に、何か言いたそうにしてたから。

由美子　…富永さんの事は心配してました。

尚雄　そうか。

由美子　時間がある時に、亘とお話なさってください。

尚雄　亘の気持ちも分からないじゃないが、仕事と個人的な感情は別だ。その辺りも富さんとはちゃんと話したし、富さんもそこは理解してくれている。

由美子　ですから、私じゃなくて、亘と話してください。私には、お仕事の事は分かりませんから。

尚雄　(じっと由美子を見て)…こないだ、おかしな事を言われた。

由美子　えっ？

尚雄　…あいや、よそう。

由美子　何ですか？

尚雄　…やっぱり、あんな病気をしたせいだな。気が弱くなってしまったようだ。

由美子　何かあったんですか？

尚雄　何でもない。私も歳をとったって話だ。自分だけは、歳はとらないくらいに思ってた。

由美子　貴方疲れてるんですよ。このところ毎日遅いから。

尚雄　…由美子、君は今、幸せか？

由美子　…何言ってるんですか。

尚雄　君は若い頃、もっとよく笑ってた。だんだん君の笑顔を見なくなったような気がする。

由美子　貴方、今日は少し飲み過ぎです。変な事言って。

尚雄　…そうかな。

由美子　そりゃあ若い頃みたいに、箸が転んでも笑えるって訳じゃないですよ。でも今だって年相応には笑ってます。

尚雄　…そうか。

由美子　私は充分幸せですよ。仕事熱心な夫と親孝行な息子がいる。これで文句言ってたら罰が当たります。そんな事より、早くお風呂に入って、今日はもう休んでください。

尚雄　ああ。そうするよ。

下手奥に向かう尚雄。ソファーに腰を下ろし、寂しげに佇む由美子。曲が流れ始める。退場せずそのまま下手前で振り返り佇む尚雄、視線はずっと由美子に注がれている。照明は尚雄の抜き。

尚雄　　いや、歳月が確かに君を変えた。あの頃の…あの頃の君はもっと…。

由美子が上手前に退場し、代わって、上手、客席寄りの明かりに、若い頃の由美子が浮かび上がる。テンション高く明るい笑顔で語る由美子。

由美子(翠・同)　尚雄さん、少しくらい上手く行かないからって、落ち込んでる暇なんてないよ。お父さんの工場(こうば)、再建するんでしょ。頑張ってお金持ちになって、親が手放した家も買い戻す、それが、亡くなった両親の為に、自分が出来るたった一つの親孝行だって言ったじゃない。それ聞いて私、偉いな〜て思ったもん。私も全力でサポートするからね。あ、そうなったら私、社長夫人だ。やった〜。(笑)
な〜んて、本当はね、私は尚雄さんと一緒にいられたら、ずっとこの狭いアパートのまんまでも、すっごく幸せなんだよ。

若い頃の由美子を照らす照明が消え、尚雄だけの抜きが残る。

尚雄　由美子、君は本当に今、幸せなんだろうか…私の夢は、望んでいた以上の形で叶ったけれど…。

舞台中央、社長室を模した明かり。尚雄が栖原と話している。

栖原　社長、今期の売上見込みですが、前年比の一、五倍です。目標達成率は実に百三十パーセントになります。ただ、利益率の伸び悩みは相変わらずですね。なので、いかがでしょう、国内工場の検査工程に最新のセンサーを導入しては。機械化で大幅な人員削減が可能となり、利益率もかなり改善されます。人減らしには社内の反発もありますが、ここは大胆に決断して頂けないでしょうか。

尚雄　…人員削減か…いいよ、君に任せるよ。

栖原　ありがとうございます。あと富永常務ですが、今後も開発部の定例会議に参加されるんでしょうか？

尚雄　そう理解しているけど、どうして？常務は慣例的に参加はしていても、技術的な事で意見なんて言わない。問題は無いだろ。

栖原　そうなんですが、良くも悪くも人望のある方なので、社員が常務の顔色を見ているのが分かるんですよ。活発な意見を促す為にも、参加はご遠慮頂いた方がよろしいかと。その代わり、毎週同じ時間に庶務の女子社員が、社内イベントや福利厚生について話しあってますから、そちらに参加して頂けたら…。

社長室の照明が消え、尚雄だけの抜きになる。

尚雄　私はこれまで、最善の道を選んで生きてきた…それは、たとえ一時的に痛みを伴う選択ではあっても、最終的には、会社にとって、家族にとって、最善の結果をもたらすと信じた道だった…。

舞台下手前、照明に一人浮かぶ亘。

亘　父さん、母さん、僕をこの家の子にしてくれて、ありがとう。二人の息子になれて、僕は本当に幸せだよ。貰った恩が大きすぎて、それは一生かけても返せそうにないけど、僕は絶対、二人に喜んで貰えるような息子になるからね。
この家に来た最初の頃はさ、僕は人見知りで、二人を随分困らせた

よね。なかなか父さん母さんって呼べなくて。僕もだんだん二人の顔を見るのが辛くなって。そう言えば、そんな時、僕に話しかけてくれたのが、あの頃よくウチに出入りしてた富永のおじさんだよ。

亘の抜きが消える

尚雄　何かを得る為に何かを犠牲にする。それは仕方のない事なんだ…少なくとも私の人生には…選ばないという選択肢は無かった…。

上手前に由美子の抜き。

由美子(翠・同)　…どうして…どうしてそんな事言うの…嫌…嫌だよ…嫌〜。

由美子の照明が落ち、ＳＥ・アパートのドアが閉じる音、階段を駆け下りる音。その後、占い師の声。

ＳＥ・占い師　貴方、本当は分かってるんですよ…本当は…。

暗転し、曲も終わる。しばらくしてまず下手前に立つ富永の抜き。少し遅れて上手前の尚雄の抜き。

尚雄　(手に富永の辞表)冨さん…これは…。

富永　わがまま言ってすみません社長。でも、技術者としての私の腕や知識は、とっくに時代遅れです。本当は定年ですっぱり辞めるべきところ、役員て事で長々とお世話になってしまいました。でも、もうこれ以上お荷物ではいられません。

尚雄　冨さん、新しい技術がどうのこうのって、そんなことは、若い連中に任せておけばいいさ。こないだも言ったよね。冨さんは私の精神的な支えだって。

富永　社長のお言葉は、本当にありがたいです。でも、やっぱりここらが潮時かと思います…実は…家内とも、余り上手く行ってなくて…。

尚雄　え、奥さんと、

富永　はい。熟年離婚って言うんですか、こないだ、突然きり出されまして。まさか自分がって思いました。あんまり突然だったんで、私、思わず怒鳴ってしまいました。何不自由なく暮らせて来たのは誰の

おかげだって。そしたら、脇で聞いてた娘が…。

尚雄　梨花ちゃん、

富永　ええ。パパは、自分の好きな事をやってきただけじゃない。家族ほったらかして、やりたいことをやってきただけじゃない、偉そうに言わないでって…梨花の奴、私の事を、ずっと大嫌いだったって…。

尚雄　…そう。

富永　いやもう、何やっても遅すぎるんです。ただ…同じ別れるにしても、少し時間作って、最後の罪滅ぼしがしたいなって、思ってるんですよ…そんな訳で、本当に申し訳ありません…。

―　暗転　―

ＳＥ・駅構内、改札付近の雑踏。ここから並行世界が始まる。舞台奥では薄明りの中で誕生日のサプライズをするために飾り付けをする翠、梨花、美寿紀、早紀、青田。

この飾り付けは、古い屋敷への転換でもある。上手客席より由美子登場。上手の抜きの中で人待ち顔の由美子。下手より出てきた尚雄を見つけ、由美子が手を振り駆け寄る。いつになく明るい由美子に驚いてる尚雄。駆け寄る由美子。

由美子　おかえりなさい。

尚雄　…どうした？

由美子　え、どうしたって、何が？

尚雄　いや、ここで何やってる？

由美子　何って？迎えに来たんじゃないの。

尚雄　迎え？どうして電車で帰るって？あ、亘が電話でもしたのか？

由美子　何言ってるの？誰亘って？

尚雄　え、

由美子　え、

尚雄　由美子、今日君はおかしいよ。(視線下)ズボンなんて穿いてるし。

由美子　毎日穿いてるけど。

尚雄　は？

由美子　あなたこそ、どうしたの、こんな高そうな背広？

尚雄　え？

由美子　いつ買ったの？ヘソクリ？ちょっと〜、

日雄　何を言ってる？今朝、君が選んでくれたスーツだろ。

由美子　え、(独白) 何これ？どっきり返し？(作り笑いで尚雄に)あなた、もしかして、何か気づいてる？

尚雄　…何か…あるのか？

由美子　　んっ…う～ん…ちょっと待ってね。

尚雄に背を向け電話する由美子。（S・E呼び出し音）照明、舞台奥で電話に出る翠を抜き。

翠　　はいはい、

由美子　　今、改札で会ったところ。

翠　　そっか、分かった。

由美子　　それでね、ちょっと様子が変なの。

翠　　どういう事？

由美子　　もしかしたら薄々気づいてるかも。

翠　　え、そうなの。

由美子　ま、どっちにしてもやっちゃうけどね。（笑）

翠　だよね。

由美子　で、そっちはどう？

翠　もうちょっとだけ時間欲しいかな。

由美子　分かった。じゃあゆっくり帰るね。

翠　お願いしま～す。

電話を終える二人。尚雄に向き直る由美子。

由美子　翠。

尚雄　え、

由美子　あの子、あんまりおなか空いてないから、夕飯は急がないって。

尚雄　　え、何、どういう事？

由美子　　いいから、いいから、(腕を取り) 久しぶりに散歩しよう。

尚雄　　さ、散歩、

上手に向かって歩き出す二人。

由美子　　夜風に吹かれながら、ちょっと遠回りして帰ろうよ。

尚雄　　由美子、君やっぱりおかしいよ。

由美子　　おかしくない、おかしくない。久しぶりにちょっとロマンチックじゃない。

尚雄　　え、

由美子　　ほら、お星様も(見上げ)あんなに綺麗に曇ってるし～。

二人が上手客席に退場すると、舞台上が明るくなりリフォーム前の古い屋敷が現れる。正面の壁、黄色い文字のハッピーバースデーと、赤と緑のＨＩＳＡＯの文字を飾り付けようとしている青田。梨花、美寿紀、早紀ら三人もそれぞれ花や国旗などの飾り付けをしている。

青田　(椅子の上から)梨花さん、高さこんな感じでいいですか？

梨花　えっとね、高さはいいんだけど。ごめん、やっぱり「ヒ、サ、オ」の赤と緑は無しかな。

青田　え、色？

梨花　うん。思った以上にクリスマスだね。

青田　それ、最初に俺言いましたよね、絶対そうなるって。

梨花　そうだっけ。

青田　言いましたよ。そしたら梨花さん、そんな事ない、目立つから赤と緑がいいって言ったじゃないすか。

梨花　とにかく直そ。赤か緑かどっちか一色にしよ。

青田　なんすかそれ〜もう時間ないすよ。

美寿紀　そのままでいいんじゃないの。誕生日もクリスマスもどっちも目出たいし。

早紀　私もいいと思います。

梨花　そおお？いい？じゃあいいや。

青田　いいんすか。

下手奥より翠登場。

翠　えっと、こっちも大丈夫みたいね。

梨花　完璧。

美寿紀　翠さん、料理は？

翠　ばっちし。そしてケーキも。

梨花　パパのケーキ出来たの？ホントに大丈夫だった？

翠　すっごいよ。お披露目するね。

梨花　なんか怖い。

翠　おじさ～ん。

富永(声)　(結婚行進曲)パパパパ～ン、パパパパ～ン、パパパパ～ン、

青田　(笑いながら)冨さ～ん、曲違ってますよ～。

富永　(二段か重ねの真っ赤なケーキを掲げて登場)パ～ンパパパ～ンパパパンパン

一同、歓声を上げる。

美寿紀　なにこのケーキ。

早紀　すっご～い、

青田　真っ赤じゃないすか～。

梨花　翠、いいのこれ？

翠　いいんじゃない。どうしても自分が作るって、おじさんの愛が籠ってるんだもん。

梨花　パパ、

富永　買ってきた食紅全部投入、六十歳の誕生日だもん、ぴったりだろ。

早紀　あ～還暦の赤ですか。

青田　なるほど。でも食欲わかない。

翠　これで準備完了ね。

美寿紀　じゃあ翠さん、説明お願いします。

翠　うん。作戦は、静かに始まり一気に盛り上げるって感じ。

梨花　というと？

翠　最初は全員奥で待機。二人が入って来てもここには誰もいないの。飾り付けには気づかれないように照明も暗くしておく。で、ウチの母さんが父さんをここ、この席に座らせる。するとどこからともなくハーモニカが聞こえてくる。それがハッピーバースデーね。

青田　何でハモニカなんですか？

早紀　私、楽器とか苦手で、でもハーモニカ位だったら何とか。

梨花　あ、早紀ちゃんが担当か。

早紀　はい。

青田　でもハモニカの音ってしんみりしてて暗くないですか？

美寿紀　だからそれが狙いなのよ。静かに始まるって。

青田　そっか。

翠　イメージはね、夜の静寂の中、近所で誰かが吹いてるハーモニカが聞こえて来るって感じ。でもその曲が終わった途端、みんなが奥で一斉に歌い出すの。

梨花　なるほど。

翠　そして、元気よく歌いながら料理もどんどん運び込む。

富永　ケーキはいつ出すの？

梨花　そりゃパパ一番最後よ。(翠に)ねっ。

翠　うん。料理を運び終えたら、おじさんはロウソク立てたケーキを

持って登場して。

富永　了解。

翠　父さんがロウソクの火を消したら美寿紀が部屋を明るくする。

美寿紀　はいはい。

翠　基本的にタイミングは全部私が合図するから。

梨花　翠、もうそろそろ帰って来るんじゃない、大丈夫？

翠　大丈夫。今玄関は鍵かかってるから。母さんは着いたらチャイムを二回鳴らすの。それが私たちへの合図。ピンポン、ピンポンって、で私たちはスタンバイ。母さんは「あら、変ね、誰もいないのかしら」とか言いながら、鍵を開けて入って来るって感じ。(ＳＥ・チャイムが二回)来た。

皆がスタンバイしようとすると、チャイムが乱打される。驚く一同。

早紀　　え、

美寿紀　　何？

鳴り続けていたチャイムが止まる。

青田　　やんだ。

梨花　　おじさん達かな？

翠　　だと思うけど…私玄関見てくるから、とりあえずみんなスタンバイして。

美寿紀　　じゃあ、私たち奥に。

早紀　　はい。

梨花　　行こ行こ。

翠は上手奥の玄関へ。美寿紀、梨花、早紀、下手奥へ。青田も続こうとするが、ケー

キを抱えようとしている富永を見て。

青田　(富永に)俺、持ちましょうか？

富永　大丈夫だよ。

ケーキを持って奥に向かう富永、後に続く青田。富永、何かに躓く。

富永　ワッ、

青田　危ない、大丈夫ですか？

富永　大丈夫、大丈夫。

富永、青田、下手奥に消える。上手奥から顔を出す翠。

翠　青ちゃん、明かり、明かり。

青田　(下手奥から顔を出し)あ～はいはい。

青田、明るさを見ながら壁のフェーダーで薄暗く調整する。

青田　　こんな感じかな。

由美子(声)　　あなた、あなた落ち着いて、

尚雄(声)　　どうして、どうしてこうなった、

翠　　(上手奥から出て小声で)来るよ、来るよ。

青田　　オッケ。

青田、下手奥に消える。翠も下手に移動、隠れて様子を伺う。上手奥より由美子が尚雄を支えるようにして登場。翠はまだ異変に気付いていない。パニックの尚雄。

由美子　　とにかく落ち着いて、

尚雄　　由美子、由美子、

由美子　ちょっとここ、ここに座って。(尚雄、上手側の椅子に腰を下ろす)

翠　(奥に小声で合図)はい、

尚雄　何なんだ、何が、何がどうなって、

由美子　あなたしっかりして、

ハーモニカの曲が流れ始める。「何でだ、何がどうして、由美子、何でこうなる、訳が分からない、」と小さな声で呟き続ける尚雄。

由美子　翠〜、

翠　え、何？

由美子　中止、中止よ、

翠　え？どういう事？

由美子　父さん、おかしくなっちゃったの。

翠　　え、

由美子　　頭が、変になったのよ。

翠　　何それ、

ハーモニカが終わり、上手奥からハッピーバースデーの歌が聞こえる。慌てて下手奥に向かう翠。尚雄の背中を擦っている由美子。

翠　　(叫ぶ)みんな待って～、中止～、中止よ～。(尚雄の元に)父さん、大丈夫？父さん？

美寿紀　　(奥に待機していた全員が現れる)　どうしたんですか？

青田　　何かあったんですか？

翠　　お父さんの様子が変なの。

富永　　社長が？

由美子　あなた落ち着いて、大丈夫よ、大丈夫だから。

尚雄　由美子、ここは本当にウチの家か？

由美子　何言ってるの？

尚雄　何で玄関がリフォーム前の古い玄関なんだ？車庫も無くなってる。

由美子　あなた、ウチはリフォームなんてしてませんし、元々車庫なんてありませんよ。

尚雄　何言ってる、新しく作ったじゃないか。それに、(立ち上がり)家の中だってほら、

翠　父さん、

尚雄　(翠が目に入らない)壁も、天井も、まるで買い戻した直後の古い我が家だ。

富永　社長、富永です。分かりますか？

尚雄　…冨さん。冨さん、今日は何でここにいるの？

富永　何でって、ここで働かせて貰ってるからですよ、社長。

尚雄　でも、今日会社にいなかったし、こないだ辞表を出したじゃないか。

富永　会社？辞表？何の話ですかそれ？

由美子　あなた、しっかりして。

梨花　おじさん、

尚雄　梨花ちゃん…。由美子、亘はまだ帰って来ないか？

一同　…。

富永　社長、今、水を持ってきますね。

翠　(富永に)おじさんありがとう。

富永　うん。(下手奥に)

翠　ねえ父さん、今日、何かショックな事でもあった？

尚雄　…。

翠　それとも、どっかで頭ぶつけたとか？

尚雄　…。

翠　父さん。

尚雄　…誰？

翠　え？

尚雄　…君は、誰？

翠　…ほんとに…本当に分かんないの？翠だよ、父さんの娘の。

尚雄　（由美子に助けを求めるような視線）由美子…。

由美子　…あなた。

富永(声)　うわっ、

梨花　ごめんなさい。もう、何やってんだろ。（下手に向かい叫ぶ）パパ、何やってんの？

冨中(声)　梨花～、ケーキやっちゃったよ～。躓(つまづ)いてケーキに、

梨花　ケーキなんて今どうでもいいから、早くお水持って来て。（戻って）ごめんなさい。

由美子　あなた、

翠　…父さん、

翠をチラリと見るが、視線を泳がせ呟く尚雄。

尚雄　夢…夢か…いや、こんなリアルな夢はない。でも、ここは何処だ…本当に私の家か…(由美子を見て)由美子…君だって、いつもの君じゃない。

由美子　あなた、

尚雄　本当に由美子なのか…(見回し)一体、どこなんだここは…。

青田と美寿紀の間から割って入る富永が尚雄にコップの水を差し出す。顔も手もケーキの赤いクリームだらけ。

富永　社長、どうぞ。

尚雄　(血だらけに見える富永を見て)うわわぁぁぁ〜。(卒倒)

富永　社長、

翠　父さん、